

知りつつ掛かる畏

— 釣狐と狸々の關係 —

堂 本 正 樹

狂言の秘曲で、若手がこれを被いて一人前になる演目『釣狐』は、

一族を釣り絶やされ、我が身も危うい老

狐は狸師の伯父白藏主に化けて尋ね、狐の

恐ろしさを玉藻前の故事によそえて語る。

狸師は改心して畏を捨てるので、老狐は安心して帰り道、捨てた笹の畏が未だ掛けて

あるのを発見する。美味そうな餌に、理性

ではそれと知りつつ匂いに誘惑され、喰い

付き、畏に掛かるが、外して逃げる。

と云う筋だ。二場に分かれ、前は化身後は

本体であるが、昔は橋掛かりで衣装を脱ぎ、

狐になった。

この現形の祖型の一つが『天正狂言本』に

ある。天正九年（一五八一）九月山城の水度

神社に演じられているのが、現在知られる記

ひ出て引入る。とめ。

録上の初見。江戸の四座付き以外の市井の狂

言の台本らしい『狂言記』は「こんくわい」

とする。この名称のもとの意は狐の鳴き声の

擬声音だが、後そこに寓意が盛られる、鶯仁

右衛門派が充てた字「今悔」は、当然「後

悔」が掛けてある。

「こんくわい」が「後悔」と聞けるのは、演

者・観客ともに、作の内容に単なる獣の民話

を超えて、人間性の「象徴」を感じ始めたか

らである。傍線の部分がそれだが、初期の

台本はここが簡単だったらしい。

『天正狂言本』には、

おひ帰る。おちさま／＼のせれふ。ふし

おじとやおもふ／＼、おぢではなふて古き

つね。後きつねになりてわなにかゝる。お

ひ出て引入る。とめ。

とのみだ。最後まで捕まて引かれて入る。

畏への様々な迷いの演技が重点になってはい

なかつたと思われる。

祖型の成立から、その時その時の解釈を伴

う伝承が末端肥大を許し、そこにこそ作の

「洗練」を担うこととなった。

前記『狂言記』は、帰途畏を発見して「旨

臭や／＼。一くちに喰はうか。や、この鼠は

親祖父の敵ぢや、一撃ち撃つて食はう。節う

たれて鼠、音にぞなく。我には晴るゝ胸のけ

ぶり、こんくわいの涙なるぞ、悲しき。くわ

い。跛座へとび入る。」とある。

以下諸本により様々に発展するのだが、現

行の和泉流が最も細かくなっているようだ。

最初杖で餌を復讐として撃ち、その匂いを

嗅ぎ、食おうとして反省し、帰ろうとしては

「餌ばかりむしって食ふに仔細はあるまい」と思い、罾に掛かりそうになり再び反省「いらぬものぢや、古塚へ戻らう」と帰り掛かり更に再度餌に立ち戻る。この長い煩悶が見せ場だ。

ここに人間の「本能と理性」が二重写しになつてゐるのは明らかで、獣の悲しみが漲るそこに人と獣の重なり合いを発見したのが、台本の発展の契機であり、深化化だった。

このヒントに、能『狸々』の間狂言が有つたのではあるまいか。現在『狸々』は前シテが無く、後だけの半能であるから気付きにくい、本来前後二場の能だったのである。その前は古曲文庫の『未刊謡曲集』一にあり、『新潮古典集成』の『謡曲集』中の「各曲解題」にも引用されている。

間狂言は、和泉流の三宅庄一手沢本に依つた『狂言集成』のそれが、『釣狐』との共通性で注目されるので、その一部を読もう。

さて又狸々を捉らへ、鞭などにて打つて其の血を取り毛氈を染め、狸々皮と號し、日本にても重寶致すと承り候。さりながら、狸々を取るは大儀なる事に有る氣に候。その仔細はまた、里遠き山川の側に、酒麴に酒を漉へ、ひしやくを打置は巾にて鞋を

拵へ、彼の材に結び附け、深く忍びて待ち候へば、狸々酒の香につき、現れ出づる。恨めしや我に此の酒を飲ませ、殺さんと謀る人の心のうたてさよ。構へて此の酒を呑み殺さるゝな。いざや帰らんと申すが、さ

すが畜類にて候ぞ。酒の香に心ひかれ、麴の側に立寄り、試みにとて少し飲む味に心をうつし、命を取らるゝを打ち忘れ、盃にうけては飲み、或はひしやくにて飲み、心の儘に飲む程に、後には酔出て、足元亂れ彼の履をはき、戯れ遊び候を、人々走り寄り、生け取ると承り候。されば古き文にも狸々能言不離禽獸と記されたり。……この「いざや帰らん」は、「古塚に戻らう」と照応する。

大藏流の古本『貞亨鞍貫本』（能楽資料集成『貞亨年間大藏流間狂言狂言本二種』）では、この「理性と本能の相克」が無く、

かしこきものと申しながら、ちくしやうのかなしさへ、だます事は夢にもしらず、とのみだが、『松井本』だと、

彼狸々酒を持って（以て）我をと覽（取らん）とする事をしつて、と覽とする者の名じ（名字）をよぶで（呼んで）云様は、汝我をと覽とする斗事（謀）をしりたり。急

でそれよすてゝされと云。里人きかぬかほゝして待申せば、頓而彼（やがてかの）酒のほとりに立よつて、先心見（試み）に酒をなめて其あぢわひを見て、さひさん心見をするにしがひ、次第に多ゝるによつて……。

云々とある。和泉流の三宅本と共通する内容ではないか。

狂言の『釣狐』は、始めは単純な獵師の狐釣りの風俗であつたものを、能『殺生石』の玉藻前の故事の語りが導入され、更に祝言能として前半が捨てられ、間狂言自体が不用となつた『狸々』のそれをヒントにして、膨らませて、それによって内容が複雑さを増し、名作となつたのではあるまいか。

狸々捕獲法の原典は、もと『呉都賦』『農田余話』の所説の展開であるらしい事は、金沢図書館蔵の『謡言粗志』にも云う通りである。しかしここでは、その出典の検討迄には及ばず、『釣狐』の膨らませ方に、『狸々』の間狂言が何らかの影響があつたのではないかと、仮説の提出のみに留めたい。